

1. 著者とは誰のことか（前編）

大学などの教員ポストにおいて採用や昇任が審議される場合には、履歴書とならんで「研究業績表」なるものを提出させられるのが常である。しかし、署名、捺印のうえで提出されるリストに記載される「私の」業績、とはそもそも何なのであろうか。「私の」という語は、それらの「業績」の所有の主体を表示しているといえるのであろうか。そもそも「業績」とは何なのだろうか。あるいはその「著者」とは誰のことなのだろうか。

学術論文などの場合、たとえ単著であっても一人称を複数形で表示することがしばしばある。「われわれの見解によれば」とか「これまでのわれわれの考察によって明らかになったことは」とかいうやつである。学生時代、この半ば学界の慣習のひとつとなっているかの観がある表現についての違和感を聞いたことがある。それは、執筆者本人が負うべき責任の回避を目論む卑怯な表現ではないか、というものであったように記憶している。これに対しては、この表現は、執筆者と、その論文を現在通読中の読者とが、少なくとも当該論文の論理的筋道を共有していることを前提にしているのだといううがった見方をすることもできよう。しかし、もしそれがあたっていとすれば、事実的指摘のみならず論理的展開すら共有することの困難な論文を目の前にするとき、「われわれなんて気安く言うんじゃないよ」と言ってみたくはないか。責任逃れである以上に不遜であるということであろう。ところが、ちょうどその場にいた一人が、パスカルを引いて、しごくまっとうな説明をしてくれた。ここでも『パンセ』を引用しておこう。

ある著者たちは自分の著作について話す時、「私の本、私の注解、私の物語、等々」と言う。そう言う彼らは、一戸を構え、いつでも「拙宅では」を口にする町人臭がぷんぷんしている。彼らはむしろ「われわれの本、われわれの注解、われわれの物語、等々」と言うほうがよかろう。というのは、普通の場合、そこには彼ら自身のものよりも他人のもののほうが、よけいはいつているからである（『パンセ』断章 43、前田陽一訳による）

なるほど一人称単数であるほうがかえって不遜であることになるというわけだ。だとすれば「私の業績表」にえらそうに「単著」と書くことさえ不遜になるであろう。この不遜さに耐えられない心やさしき著者は、論文や著書の末尾に「謝辞」を書くことによって気持ちをまぎらわせようとする。曰く「本論は、A 氏との議論に負うところが大きい」とか「本書は、ある意味では担当編集者 B 氏との共著とさえいえるだろう」とかいった決まり文句がそれである。しかし、これは、A 氏の業績表に当該論文が挙げられたり、B 氏の銀行口座に印税が振り込まれることがありえない以上、実質のない美しき慣習であるにとどまる。したがって、完璧を期するためには、もう一行、「しかし、内容上の誤りなどの最終的な責任はもちろん筆者個人に属する」とつけ加えなければならぬ。

慣習についてもうひとつだけ蛇足をつけ加える。科学研究費の申請や大学院の新設時などに提出する業績表に「単著、共著の別」をいちいち記入しなければならないということは、単著が「あたりまえ」の「文科系」人間には不思議であった。ところが「理科系」では、共著が「あたりまえ」であり、そこにはまた別の習慣が存している。1995 年に発表されたトップクォークの発見を報じた論文の著者は、なんと 403 人もいるそうである。また、ある分野では、当該研究全体に関わる研究補助金をとってきた人物が、その研究の成果であるすべての論文のファースト・オー

サーになるという慣例があるので、ある教授の年間論文執筆数は形式上は軽く百を越えるとのことである。何番目までの著者が当該論文を自らの業績としてリストに掲載してもよいという取り決めもローカル・ルールとして存在しているらしい。

アンソニー・ヒューイッシュは、1967年のパルサーの発見によりノーベル賞を受賞したが、受賞の理由となった論文は彼の指導する大学院生などとの共著であり、しかも実際に電波望遠鏡を操作しデータ解析を行っていた際に、後にパルサーと呼ばれるようになる天体を「発見」したのは、ジョセリン・ベルという大学院生であった。このため、ベルもまたノーベル賞の共同受賞者であるべきではないかという論争がもちあがったことがある。このように、とくに学術論文の場合、「誰が実際にそれを書いたのか」ということが問題になりうる。もちろん、キーボードをたたいた者、アイデアを出した者、研究基盤を構築した者から、はては研究費を獲得してきた者に至るまでのなかで、誰が著者であるのかということは、一定の科学者共同体のなかで常識や慣習によって決定されているのであろうが、昨今流行の学際的研究組織においては、慣習の相違が軋轢を生む原因ともなっている。

この著者性の問題は、電子ネットワーク時代においてよりいっそう顕在化することになる。かつて、まだ日本でインターネットが実用化されておらず、学内 LAN もなかった時代に、同僚が3台のコンピュータを簡易ネットワーク接続して、ファイルを共有しつつ共著論文を執筆している現場にいわせたことがあるが、新鮮な驚きであった。それが今ではさほど専門的な技術や知識がなくとも太平洋をはさんで可能になっている。共同著作の可能性は、テクノロジーの進化とともにますます増大することになるだろう。そしてそれは、著者性というものをこれまでのものとは少々異なったものにする可能性もあるのだ。(続く)

(2000年6月)